

MENSURA ZOILI

芥川龍之介

青空文庫

僕は、船のサルーンのまん中に、テーブルをへだてて、妙な男と向いあっている。——
 待つてくれ給え。その船のサルーンと云うのも、実はあまり確かでない。部屋の具合とか窓の外の海とか云うもので、やつとそう云う推定を下しては見たものの、事によると、もつと平凡な場所かも知れないと云う懸念がある。いや、やつぱり船のサルーンかな。それでなくては、こう揺れる筈がない。僕は 木下李太郎 君ではないから、何サンチメートルくらいな割合で、揺れるのかわからないが、揺れる事は、確かに揺れる。嘘だと思つたら、窓の外の水平線が、上つたり下つたりするのを、見るがいい。空が曇っているから、海は煮切らない 緑青色を、どこまでも拵げているが、それと灰色の雲との一つになる所が、窓枠の円形を、さつきから色々な弦に、切つて見せている。その中に、空と同じ色をしたものが、ふわふわ飛んでいるのは、大方鷗か何かであろう。

さて、僕の向いあっている妙な男だが、こいつは、鼻の先へ度の強そうな近眼鏡をかけて、退屈らしく新聞を読んでいる。口髭の濃い、顎の四角な、どこかで見た事のあるよな男だが、どうしても思い出せない。頭の毛を、長くもじやもじや生やしている所では、どうも作家とか画家とか云う階級の一人ではないかと思われる。が、それにしては着てい

る茶の背広が、何となく釣合わない。

僕は、暫く、この男の方をぬすみ見ながら、小さな杯さかずきへついで、甘い西洋酒を、少しずつなめていた。これは、こつちも退屈している際だから、話しかけたのは山々だが、相手の男の人相が、甚はなはだ、無愛想に見えたので、暫く躊躇ちゆうちよ躊躇ちゆうちよしていたのである。

すると、角かく顛あこの先生は、足をうんと踏みながら、生あくびを噛かみつぶすような声で、「ああ、退屈だ。」と云った。それから、近眼鏡の下から、僕の顔をちよいと見て、また、新聞を読み出した。僕はその時、いよいよ、こいつにはどこかで、会った事があるのちがいないと思つた。

サルーンには、二人のほかには誰もいない。

暫くして、この妙な男は、また、「ああ、退屈だ。」と云った。そうして、今度は、新聞をテーブルの上へ抛り出して、ぼんやり僕の酒を飲むのを眺めている。そこで僕は云つた。

「どうです。一杯おつきあいになりませんか。」

「いや、難ありがと有う。」彼は、飲むとも飲まないとも云わずに、ちよいと頭をさげて、「どうも、実際退屈しますな。これじゃ向うへ着くまでに、退屈死たいくつじにに死んじまうかも知れま

せん。」

僕は同意した。

「まだ、ZOILIAの土を踏むには、一週間以上かかりましょう。私は、もう、船が飽き飽きしました。」

「ゾイリア——ですか。」

「さよう、ゾイリア共和国です。」

「ゾイリアと云う国がありますか。」

「これは、驚いた。ゾイリアを御存知ないとは、意外ですな。一体どこへお出でになる御心算か知りませんが、この船がゾイリアの港へ寄港するのは、余程前からの慣例ですぜ。」

僕は当惑した。考えて見ると、何のためにこの船に乗っているのか、それさえもわからない。まして、ゾイリアなどと云う名前は、未嘗、一度も聞いた事のない名前である。

「そうですか。」

「そうですとも。ゾイリアと云えば、昔から、有名な国です。御承知でしょうが、ホメロスに猛烈な悪口をあげせかけたのも、やっぱりこの国の学者です。今でも確かゾイリア

の首府には、この人の立派な頌徳表しょうとくひょうが立っている筈ですよ。」

僕は、角顛かくあごの見かけによらない博學に、驚いた。

「すると、余程古い国と見えますな。」

「ええ、古いです。何でも神話によると、始は蛙かえるばかり住んでいた国だそうです。パラ・アテネがそれを皆、人間にしてやったのだそうです。だから、ゾイリア人の声は、蛙に似ていると云う人もいますが、これはあまり当あてりになりません。記録に現れたのでは、ホメロスを退治した豪傑が、一番早いようです。」

「では今でも相当な文明国ですか。」

「勿論です。殊に首府にあるゾイリア大学は、一国の学者の粹すいを抜いている点で、世界のどの大学にも負けないでしょう。現に、最近、教授連が考案した、価値測定器の如きは、近代の驚異だと云う評判です。もともと、これは、ゾイリアで出るゾイリア日報のうけ売りですが。」

「価値測定器と云うのは何です。」

「文字通り、価値を測定する器械です。もともと主として、小説とか絵とかの価値を、測定するのに、使用されるようですが。」

「どんな価値を。」

「主として、芸術的な価値をです。無論まだその他の価値も、測定出来ませんがね。ゾイリアでは、それを祖先の名誉のために MENSURA ZOILI と名をつけたそうです。」

「あなたは、そいつをご覧になった事があるのですか。」

「いいえ。ゾイリア日報の挿絵^{さしえ}で、見ただけです。なに、見た所は、普通の計量器と、ちつとも変りはしません。あの人^{あが}が上る所に、本なりカンヴァスなりを、のせればよいのです。額縁や製本も、少しは測定上邪魔になるそうですが、そう云う誤差は後で訂正するか、大丈夫です。」

「それはとにかく、便利なものですね。」

「非常に便利です。所謂^{いわゆる}文明の利器ですな。」角顯は、ポケットから朝日を一本出して、口へくわえながら、「こう云うものが出来ると、羊頭^{やうとう}を掲げて狗肉^{くにく}を売るような作家や画家は、屏息^{へいそく}せざるを得なくなりませう。何しろ、価値の大小が、明白に数字で現れるのですからな。殊にゾイリア国民が、早速これを税関に据えつけたと云う事は、最も賢明な処置だと思えますよ。」

「それは、また何故^{なぜ}でしょう。」

「外国から輸入される書物や絵を、一々これにかけて見て、無価値な物は、絶対に輸入を禁止するためです。この頃では、日本、英吉利、独逸、奥オストリイ、フランス、露西亞、伊太利、西班牙、亜米利加、瑞典、諾威などから来る作品が、皆、一度はかけられるようですが、どうも日本の物は、あまり成績がよくないようです。我々のひいき眼では、日本には相当な作家や画家がいそうに見えますがな。」

こんな事を話している中に、サルーンの扉が^{ドア}あいて、黒坊の^{くろんぼ}ボーがはいって来た。藍色の夏服を着た、敏捷^{びんしょう}そうな奴である、ボーは、黙って、脇にかかえていた新聞の一束を、テーブルの上へのせる。そうして、直^{すぐ}また、扉の向うへ消えてしまう。

その後で角頭は、朝日の灰を落しながら、新聞の一枚をとりあげた。楔形^{せつけいもじ}文字のような、妙な字が行列した、所謂^{いわゆる}ゾイリア日報なるものである。僕は、この不思議な文字を読み得る点で、再びこの男の博学なのに驚いた。

「不相^{あいかわらず}変、メンストラ・ゾイリの事ばかり出ていますよ。」彼は、新聞を読み読み、こんな事を云った。「ここに、先月日本で発表された小説の価値が、表になって出ています。測定技師^{きしやう}の記要^{きよう}まで、附いて。」

「久米^{くめ}と云う男のは、あるでしょうか。」

僕は、友だちの事が気になるから、訊いて見た。

「久米ですか。『銀貨』と云う小説でしょう。ありますよ。」

「どうです。価値は。」

「駄目ですな。何しろこの創作の動機が、人生のくだらぬ発見だそうだからな。そしておまけに、早く大人が^{おとな}つて通がり^{つう}りそうなトーンが、作全体を低級な卑^{いや}しいものになっていると書いてあります。」

僕は、不快になった。

「お気の毒ですな。」角頭は冷笑した。「あなたの『煙管^{きせる}』もありませんぜ。」

「何と書いてあります。」

「やつぱり似たようなものですな。常識以外に何も無いそうですよ。」

「へええ。」

「またこうも書いてあります。——この作者早くも濫^{らん}作^{さく}をなすか。……」

「おやおや。」

僕は、不快なのを通り越して、少し莫迦^{ばか}莫迦^かしくなった。

「いや、あなた方ばかりでなく、どの作家や画家でも、測定器にかかっちゃ、往^{おう}生^{じょう}で

す。とてもまやかしは利きませんからな。いくら自分で、自分の作品を賞め上げたって、現に価値が測定器に現われるのだから、駄目です。無論、仲間同志のほめ合にしても、やっぱり評価表の事実を、変える訳には行きません。まあ精々、骨を折って、実際価値があるようなものを書くのですな。」

「しかし、その測定器の評価が、確かだと云う事は、どうしてきめるのです。」

「それは、傑作をのせて見れば、わかります。モオパッサンの『女の一生』でも載せて見れば、すぐ針が最高価値を指しますからな。」

「それだけですか。」

「それだけです。」

僕は黙ってしまった。少々、角顛かくあじの頭が、没論理ぼつろんりに出来上っているような気がしたからである。が、また、別な疑問が起つて来た。

「じゃ、ゾイリアの芸術家の作った物も、やはり測定器にかけられるのでしょうか。」

「それは、ゾイリアの法律が禁じています。」

「何故でしょう。」

「何故と云って、ゾイリア国民が承知しないのだから、仕方ありません。ゾイリアは昔

から共和国ですからな。Vox populi, vox Deiを文字通りにじゆんぽう遵奉する国ですからな。」

角顛は、こう云つて、妙に微笑した。「もつとも、彼等の作物を測定器へのせたら、針が最低価値を指したと云う風説もありますがな。もしそうだとすれば、彼等はディレムマにかかつている訳です。測定器の正確を否定するか、彼等の作物の価値を否定するか、どっちにしても、ありがた難有い話じやありません。——が、これは風説ですよ。」

こう云う拍子ひょうしに、船が大きく揺れたので、角顛はあつと云う間に椅子から、ころがり落ちた。するとその上へテーブルが倒れる。酒の罈びんと杯さかずきとがひっくりかえる。新聞が落ちる。窓の外の水平線が、どこかへ見えなくなる。皿の破れる音わ、椅子の倒れる音、それから、波の船腹へぶつかる音——、衝突だ。衝突だ。それとも海底噴火山の爆発かな。

気がついて見ると、僕は、書齋のロッキング・チェアに腰をかけてSt. John ErvineのThe Criticsと云う脚本を読みながら、昼寝をしていたのである。船だと思つたのは、おおかた大椅子の揺れるせいであろう。

角顛は、久米のような気もするし、久米でないような気もする。これは、未だにわからない。

(大正五年十一月二十三日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集¹」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

MENSURA ZOILI

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>